

教育科学研究会通信

京都教科例会案内 365号

7月号



野生のねこはたくましく 自然と生きる

日時 2023年7月15日(土) pm6時30分～(日程変更注意)

場所 乙訓教育会館

(教育8月号 1時開催 まちがいです)

内容 第348回7月京都教科例会

提起

ことばとからだ ことばを文字にとじこめない

教育7月号 第1特集を読む

提起

寺井 治夫氏(京都)

ことばとからだの関係 国語教育 英語教育との関係、ことばと人間の成長など多面的な角度から特集1を検討したいと思います。

みなさんの参加をおまちしています。

365号目次

1, 7月例会案内	1
2, 関西教科研報告	3
今後の例会予定	4
3, わたしの研究ノート(28)	佐藤年明 7
4, 連載(10)	井上力省 12
5, 編集後記・ニュース	13

第13回 関西教科研大会（347例会）の報告。6/24西宮

はじめに

第13回関西教科研集会在西宮勤労会館で開かれました。石本代表の挨拶のあと3人の現場の教師の方から報告があり、それをうけて高橋さんの講演、クロストークと続きました。スケッチ風にまとめてみます。

(正確な音声おこしではないのでご容赦ください)

提起

教師を「いじめる」教育政策史
—ホントのしごとが、なぜできない?—

提起 高橋 哲 大阪大学教授

リレートーク

奈良の入澤さんは「暗い話になりますが」と言いつつ、勤務している学校の素晴らしさ、伝統、そこで働く誇りを語られた。全学級で日記を取り組み子どもとの対話をしている様子も。しかし、評価があらゆるところに入り込み、テストで締め付け。学力テスト 教員評価、お金をちらつかせてしめつける。校長も言わされているのでしょが変わってきました。「会議で話し合うのがおかしい。非効率な会議するな。批判をするな。法令違反だ」と 脅しのような言葉が発せられる。校長が決めると豪語する。しんどくなってきて抵抗しない 無気力になり、効率を求め自分がいる。なんだか 自信がもてないのです。

大阪の中林さんは大規模の中学校で「いらない?仕事」をこれでもかとやらされる。交流が苦手なクラスの ある男の子が 購買部で買い物をしたので「初めてのお使いや」とみんなで拍手しました。一見、馬鹿馬鹿しい話 楽しい、不登校の子が来たこともうれしかった。こういう話が大事ではないか。無駄なこととしてしんどくなっている。教務部に属しているが仕事多くて 物言わなくなる。職員室がギスギスしている。ある事でミスした自分だが子どもに支えられた。自分のミスも多忙からくる疲労が一つの原因と思っています。ミスはよくないことですが。

和歌山の龍神さんは、6年の時にいじめを受けた体験が「教師になろう」としたきっかけです、と自分の生い立ちを話されました。初任から2年目、学級崩壊のような状態になり、担任を外されました。転勤して今の学校は楽しいです。管理職の雰囲気で大いぶ違うと思います。何がそんなにしんどいのかと思うのですが、あまりにも多すぎて、思考停止のような状態です。行き着くひまもなく時間がたちます。 インスタ インターネットで安直に教材作りでない学びをしたいです。子どものことをもっと話したいです。

3人のトークをうけて

高橋哲講演 問題提起です。

高橋さんは3人のトークで印象に残っている言葉として「上から 金をちらつかせ」「無駄なことが多くなっている」「上位下達の命令」の3点を挙げられ、今、現場が「教師やめるか 人間やめるか」の選択を迫られている。この10年で教師をいじめる政策がギアチェンジされたとみるべきだ、と最初に話されました。

教員不足の問題がいわれているが、若者の教師離れが深刻で、単なる臨時的不足ではとらえられない。採用したのに離職が多い、精神疾患の増大していることが問題である。長時間労働だけがブラックだけではなく働かされている中味がブラックなのだ。第二次安倍内閣の弊害がおこっている。岸田内閣はその尻拭いで、パッチワークにすぎない。表面の言動に騙されてはいけない。新自由主義の教育改革を推進する支配体制の強化 人事直結型教員評価、治安対策としての国家主義・復古主義—道徳教育の強化がある。「いじめ対策」などは治安対策としてとられている。新自由主義教育改革による病理としての「いじめ」であると結ばれた。

最後に何をなすべきかという点で3つ提起されました。自民党給特法改正案は何をもたらずのか、よくみきわめること。教師「いじめ」教育政策の帰結として、物いわぬ教師、物考えぬ教師、管理職としての教師づくりがあること、トップダウンとマニュアル化された学校、教師の「不感症」状態の蔓延、たとえとして大雨の中でもあいさつ運動をやめない校長が目の前で泣いて登校しづりをしている子ども見て見ぬふりをして素通りしている例をあげられました。何よりも教育を守る保護者・市民とのつながりが重要だとして、石本さんの「寿（ことほ）かれる」教育改革の重要性を話されて、ガス抜き対応に終わらないようにと講演を結ばれました。

講演・問題提起をうけてのクロストーク

「目の前の子どもを見ても余裕がない自分がある、」「1年生が大変、でも考えてみればコロナ禍の子どもだから体験をいっぱいさせねば」「ブラックは質的な問題とわかった」「波風たてる しんどいけど、それが人間らしいのでは」「そら確かにしんどい、めざわりの政策に惑わされていたとわかった」などの声がだされました。

展望とまではいかないが、「諦めたくないから 喋る」「子どもは常に新しい、自分を信じる 繋がっていききたい」「簡単に子どもたちを社会に適応させたくない、仲間を広げていきたい」「好き勝手ではなくてホントにしたい仕事をしたい」「教育政策がブラックだ。教師のせいではない。子どもに目を向けさせないブラック政策だとわかった」「共有したいのにできないのは、不感症状態の蔓延、そうせざるを得ない人たちが増えている」「過剰適応している、不安 荒れに対する恐れがある」「子どもを信じる？ 難しいから締め付ける キッチンとするがいいにまどわされる」「子どもとのムダな時間が楽しみたい」「あかんことはあかんといえればいい、管理的に言うのか こどもの声を聞くのか考えたい」などなどの意見がでました。充実したひとときでした。

研究会で話された魅力的な若い女性教員の人たちは、全体からみれば少数なのかもしれない。若い教師の精神疾患、離職も増え、教師志望が減少する中で、どこに希望をみいだすのか。やはり過去に学び（歴史から学び）したたかに生きる、自らの弱さを認識しながら自己責任の呪縛におちいらぬで生きる、そんな思想の構築が大事なのではないかと直観的に思いました。

今後の例会予定

※8月以降の例会予定は7月例会で確認します。

いくつか事務局で確認した案です。

- ① 開催は第3土曜 夜6時半を基本としますが、状況によって変更する。
(私事ですが吉益が大学のスクーリング出張で重なる日があるのでみなさんと検討して決めていきます)
- ② 例会内容は特集を基本に論文を選定するが、提案者の自由な思いの発表や参加者の問題意識、近況報告などを大切にする。
- ③ 京都教科研の例会を可能な限り無理せず継続開催をする。

◆特集予定

9月	第1特集	教育政策	第2特集	本雑誌	教育学
10月	第1	生徒指導	第2特集	大学の学び直し	
11月	第1	勤務実態	第2特集	子ども庁	
12月	第1	特別支援	第2特集	「公立」のありかた	

▲例会計画（吉益案で提案者の了解はまだです）○は第3土曜以外です。

- 8/26(土)夏の交流 ZOOM開催 近況報告（大会感想にこだわらず）
お茶、ビール？を飲みながら
- 9/16(土) 9月号特集 教育政策 提起 大西さん
- 10/21(土) 10月号特集 大学教育 提起 井上さん
- 11/25(土) 11月号特集 公立の意味 提起 渡部さん
- 12/16(土) 懇親会

大会予定

詳細は教科研HPを参照してください。そこから申し込んでくださいね。

2023年8月8日(火)～8月10日(木)

形式 対面&オンライン

初日「教科研講座」・映画「プリズン・サークル」上映は対面のみ

会場 飯能市市民会館

9日 10日 自由の森学園中学校・高等学校

吉益敏文「生活綴方を実践する教師の『まじめさ』に関する考察——5人の教師の聞き取りから——」（武庫川臨床教育学会『臨床教育学論集』第14号 2022.12.10 所収）

【3回中の3回目】

佐藤 年明

第3章 教師のまじめさ

吉益氏は勝田(1953)における恵那の教師についての考察（勝田守一「変革される教師像——林鉦三氏の実践が教えるもの——」）に拠りながら、以下のように述べます（下線は引用者）。

【戦前の「子どもとともに生きる」というまじめさがあったからこそ質的に深い「こどもと生きる」姿勢につながっていく。教師のまじめさが戦前の「負い目」を自覚させる。「この真面目さなしに、自己改造は絶対にあり得ない」そうでなければ「捨てる自己は変革されず、所有されたものが身を離れるだけ」と書いている。過去の「まじめさ」は戦争に加担してしまうが、その「まじめさ」が「負い目」を自覚させ質的に深い自己批判につながり、子ども理解をともなった生活綴方実践に結実していく。だからこそ戦後の「新教育」に簡単になびくことがなかったのである。もちろん恵那の教師たちにとって教職員組合の結成や社会科学の学習を重ねたことが「まじめさ」を深く重いものにしていく上で不可欠であった。ここでふれられている「負い目」と教師のまじめさとは何か。筆者の教師生活から考えてみると、自分は良かれと思って行動したとしても相手（子ども・保護者）を傷つけたりすることはおこる。筆者は教師と子どもとの関係でそういう苦い経験を何度もした。過去の行動はとりかえせないが、そこに自己の行動を俯瞰し、負い目を感じることが相手を理解する一歩になり、次の自分自身の成長、思想形成につながる。それが人の痛みに寄り添い、他者理解を通して自己理解に繋がっていく。教師のもっている「権力性」を自覚し、相手に対する想像力をいかに発揮するかが「負い目」の自覚であり「まじめさ」に繋がるのである。勝田は自らの戦争責任という「負い目」の自覚が恵那の教師の「負い目」に共感し、その深い自己批判を「まじめさ」の原動力とみたのである。ここが何よりの原点である。勝田は恵那の教師たちの戦争責任にたいする「負い目」を自分の戦争責任と重ねたのである。

勝田の言う「まじめさ」とは、「負い目」の自覚と自己批判の深さを問うたと考える。】（P.83 左段-右段）

戦前、「子どもとともに生きる」という「まじめさ」を持ちながらも戦争に加担にしていっていった恵那の教師たちが、敗戦後その「まじめさ」ゆえに「負い目」を自覚して自己批判に到り、そこから（「新教育」になびくことなく）生活綴方教育に踏み出していき、そのプロセスを吉益氏は、自らの教師人生の振り返りと結びつけ、その中で教師として子どもや親を傷つけてしまい、そのことは取り返せないという「負い目」を背負いながら、その「負い目」とは取り返せないものを悔い続けるということではなくて相手への想像力を発揮すること、相手を理解することの第一歩であり、自分自身の成長、思想形成につながる、つまり前を向いて進むことにつながっていくと積極的に捉えています。それは、簡単に過去を清算してしまおうとする姿勢ではなくて、取り返せない悔いがあるからこそ敢えて前を向く、しかし悔いある過去は消え去ったわけではないというある種の《循環的な苦しみとそこからの再出発》を含むものであると私は理解しました。

吉益氏はもちろん、戦前戦後を生きた恵那の教師たちと吉益氏自身を同列において論じていないと思います。私は吉益論文を読み、関連して勝田・佐藤広美・佐貫の論稿を読みましたが、1954年生まれで全く戦争時代を経

験していない者として、もちろん戦争に加担した恵那の教師たちを鞭打つことはできないし、また戦争を経た恵那の教師たちがどのような悔恨や葛藤や自責を経て生活綴方による新しい教育へと踏み出していったのかについても、率直に言って想像に余るものがあります。ただただ、先輩教師たちがそのような経験をしたという事実として受け止めることしかできません。しかし長く小学校教師として生きてこられた吉益氏は、私のような傍観者の受け止めでは済ませておられません。具体的には書かれていませんが、子どもや親を傷つけてしまった自らの教師としての「負い目」を捉え返されました。「負い目」自体は消せない、消せないけれども、「負い目」を背負いながら教師として子どもたち（や親）の傷みを理解し寄り添おうとする教師としての自らの姿勢を常に問い直し、教師として成長していくことで子どもや親との次の出会いをより良きものとすることはできる、と捉えられました。

戦前・戦後の教育を担った教師たちの中には、弁解・自己弁護に努めた人もいます。「あの時は仕方なかったんだ。私も決して心から戦争に賛成していたわけじゃない。しかし、反対を表明すればたちまち特高につかまり、悪くすれば死を意味した。死を賭してまで反対する勇氣はなかった。私は弱かった。だけどほとんどの教師がそうだったと思う。誰が私を責めることができるだろうか。」（この独白は佐藤の勝手な創作ですが）というように。

吉益氏は自らの教師人生を振り返って、【自分は良かれと思って行動したとしても相手（子ども・保護者）を傷つけたりすることはおこる。筆者は教師と子どもとの関係でそういう苦い経験を何度もした。】(P.83 左段)と書かれています。もちろんそうした苦い経験についても、本人がそうしようと思えば、あの時はこういう事情だったから仕方がなかったんだと言い訳することもできなくないでしょう。しかし、現代に生きる教師たちは、「戦争だったから、戦時体制だったから、どうしようもなかったんだ」というように社会体制のせいにして言い訳することはできません。戦時下と現代では時代も状況も全く違うとは言え、一教師としての子どもや親との関係における悔いというのは、まじめな教師にとっては、言い逃れが許されないという意味で、ある意味で戦時体制における過ちの悔悟よりももっと苦しいものかもしれません。

「負い目」というのは自分の中で決して消し去ることができないものです。私も40年近く続けてきた大学教師生活の中でそうした「負い目」をいくつも持っています。現在から将来に向けての教師生活を少しでも良きものにするためにいくら努力したとしても、過去の事実とそれへの「負い目」は消えないのです。ハッピーエンドにはできないのです。消すことのできない「負い目」を常に心にとどめながら、それはそれとしながらも、今の自分が教師として精進するしかないのです。いや、「精進」と簡単に書きましたが、その中味が問題です。吉益氏は、【負い目を感じることで相手を理解する一歩になり、次の自分自身の成長、思想形成につながる。それが人の痛みを寄り添い、他者理解を通して自己理解に繋がっていく。教師のもっている「権力性」を自覚し、相手に対する想像力をいかに発揮するかが「負い目」の自覚であり「まじめさ」に繋がる】と書いておられます。「負い目」は心のうずきとして自分の中にしまいこんでしまえばいいものではない、ということです。自分の「負い目」が相手の痛みを寄り添うこと、相手を理解することにつながる、ということです。「負い目」を持つ自分を自覚することが、「権力性」への歯止めになる、ということです。ただそれらのことは、「負い目」の《効能》ではないと思います。「負い目」自体はどうしようもないものとして自分の中にある。その、《自分の中に「負い目」がある》という厳然たる事実が、自分の教師としての子どもや親への関わり方を自省せよと要求してくる。そのことにきちんと向き合う生き方が教師としての「まじめさ」である、ということになるのでしょうか。

長い教師経験から絞り出された吉益氏の述懐を、私が訳知り顔に《教訓化》するかなのような文章を書くつもりはないのですが、そうなってしまっているかもしれません。

終章 現代に活かす視点

吉益氏は、佐藤広美『戦後教育学と戦争体験』（2021）を引きながら、以下のように述べます。

【勝田は戦前の恵那の教師を単純に批判するのではなく、「子どもとともに生きる」という普遍的価値に注目し、そこから恵那の教師の「まじめさ」と「負い目」の自覚から生じた自己批判の姿勢に注目した。佐藤はその勝田の着眼点に注目している。そして「時局の教育」に貢献するという願望は誰にでもあるが、恵那の教師たちは子どもとともに生きる「まじめさ」の重要性と困難性をしっていた。しかし、それを貫けなかった「負い目」が戦後の出発点であった。戦前の状況はものと言えない状況にあった。そうした中での恵那の教師の思想形成に勝田は注目した。】（P. 83 右段）

さて、戦前・戦後を生きた恵那の教師たち、それについての勝田や佐藤広美の考察を踏まえた上で、本論文での5人の教師たちの語りの聞き取り結果について、吉益氏は最後に以下のようにコメントしています。

【現代の学校においては戦前とは異なるが、全国学力調査や PDCA 体制のなかでしらすしらすのうちに組織の論理や権力の意図する方向が忍び込む。その中で、子どもとともに生きるという事は戦前とは違った困難がある。そのなかで「負い目」を自覚するという事は、自己を客観化し俯瞰しなければならない。そうしないと質の深い自己批判は生まれない。

5人の教師たち、鹿島は「権威的实践」に対する矛盾、西條は組合に対する政治的攻撃に対する抵抗、Cは初任研や管理職の「圧力」からの葛藤、DやEは「学力調査」体制の呪縛から、子どもとともに生きる姿勢をつらぬかなければならない「負い目」を感じている。常に生活綴方の思想に学び、深い子ども理解に向かったのである。それは、模索と失敗、挫折を通して自分の思想にしたのである。そこに子どもと共に生きる教師を探求しようとした。誠実に子どもと対峙した。

今日の時代の中で、「負い目」を感じながら、子どもの前で謙虚に生きる。子どもとともに生きる教育実践はそう簡単にはできないかもしれない。「まじめ」であるというのは権力に無批判に同調する事ではない。戦前のような教師の姿勢ではない。「2009 年型教職観」は肯定しない。また「まじめ」は自分を追いつめたり「自己責任」の呪縛に陥る事ではない。勝田が恵那の教師に注目したように、筆者が4人の教師の語りから考えたことは「子どもとともに生きる」という普遍的価値に対する思想を形成することである。その思想とは特定の主義や主張ではない。徹底して子どもの前に謙虚で「負い目」を常に自覚しながら実践する。生活綴方の思想をもってしたたかに生きるということである。】（P. 84 左段）

本論文第3章で吉益氏自身の教師生活における「負い目」の述懐を読んだ時、具体的事例は紹介されていないにも拘わらず私はそれを吉益氏の個人的な失敗への反省と読み、戦争体制をくぐらざるを得なかった恵那の教師の「負い目」とは違うものにとらえていました。しかし上記の総括的考察を読んで、吉益氏の「負い目」把握についての自分の解釈は狭すぎたと考え直しました。

第2章における5人の教師の語りの中からは、私自身は各氏の「負い目」の意識については必ずしも明瞭には読み取れませんでした。ただ、子どもたちが伸びていくということへの感動、《教師が子どもを変えた》というような勘違い・思い上がりをしてはいけないという自戒、子どもたちにしっかりと向かい合いたいという気持ちなどは読み取ることができました。このことを裏読みすると、自分個人の未熟さや過ちからにせよ、本意ではない他からの圧力・強制によってにせよ、子どもたちとの向き合い方、関わり方を間違えてしまった、そのことにより子どもを傷つけてしまったという後悔もまた、5人の教師たちの実践の紆余曲折の中で生じていたであろうと推測することができます。自分の責任から発していない不本意な対応だったとしても、生身の教師が生

身の子どもに一回きりで繰り返せない関わりをしている以上、子どもとの関係では《客観的状况からくるやむを得ない対応の誤り》と《自分個人の過失・失敗による対応の誤り》を截然と区別してしまうことはできず、両者を含めての子ども（や親）への「負い目」として教師の内面に沈殿していく、ということでしょうか。

自らの教育実践における失敗、そのことからくる子どもたちへの「負い目」。そうしたことについて、まじめな教師たちが集う全国の自主的サークルなどでは数多く議論・交流されてきたことでしょう。しかし、例えば官製研究会とか、教育雑誌とか（『教育』誌は違いますが！）の場では、教師の失敗をそのことからくる「負い目」を前面に出して話題にすることは多くないのではないのでしょうか。もちろん吉益氏は、「負い目」を持たない教師はホンモノじゃないと書かれているわけではないし、私もそうは思いませんが。

拙著『「生きる力」論批判』（三重大学出版会 2019）の「はじめに」で私は次のように書きました。

「本書で批判的に検討する『生きる力』論は、1990年代に登場し日本の学校教育に大きな影響を与え続けてきた教育目標理念である。

『生きる力』の主語、主体は何か？ もちろん子どもである。

その『力』が形成されるものであるとしたら、誰が形成するのか？ もちろん子どもである。

では『生きる力』がないと、なくなると、どうなるのか？ ……その時は人は、子どもは、死ぬしかないだろう。生きる『力』がないわけだから。

では、その大切な、生きる上で不可欠の『生きる力』は、どこで形成されるのか？ 学校で？ それでは学校へ通って教師からの働きかけを受けなければ、子どもは死ぬのか？

1990年代に登場した『生きる力』論に接した時の私の強烈な違和感の源はここにある。子どもは学校教育を受けることによって『生きる力』を形成するのであって、学校教育なしには『生きる力』を形成できず、つまり死んでしまうのか？

この疑問の次に湧いてきたのは、次の非難の言葉である。

『自惚れるな、学校教育！』（P.1-2）

ここで私が「非難」しているのは、1996中教審答申とそれに基づく文教政策であり、非難の対象は「生きる力」を学校教育の目標に掲げたことです。「自惚れるな！」と非難した相手である「学校教育」の当事者に私自身もまた含まれていることは、もちろん自覚しています。

拙著「はじめに」で私が言いたかったことの核心は、目の前の生きている子どもたち、その子たちがこうして生きているという「事実」に対して、教育に携わるものは謙虚であれ、ということです。間違っても、《生かしてやっている》《「生きる力」を育ててやっている》などと勘違いするなかれ、ということです。このことは、吉益氏が恵那の教師や彼らから学んでいる勝田・佐藤広美や、吉益氏が語りを聞いた5人の教師たちから学びとろうとされていることと通じていると私は思います。

吉益論文の総括部分で議論されていたことのキーワードの一つは、教師の「負い目」でした。「負い目」は過去における教師自身の子ども（や親）に対する関わり、働きかけにおける失敗、誤りに対する自責の念だと私は理解します。その自責を捨てずに持ち続けることが、子どもたちに接する時に先入見にはまらずに虚心坦懐に彼らを掴むことにつながるし、子どもたち自身が伸びてゆく姿を「自分が育ててやった」などと自惚れることなく喜んで見守ることができるのではないか。それでも、完璧な人間はいないわけだから教師はまた誤ることがあり、残念ながら「負い目」は増えていくかもしれない。しかし、それまでの「負い目」を忘れない限り、なるべくなら新たな「負い目」を増やさないよう努力することはできると思うのです。

もちろんこのことは、それでは子どもにどう接したらいいのかと手を拱いてしまうということとイコールではありません。そういう局面もあるでしょうが、それを含めての試行錯誤による成長が教師には必要なのだと思

ます。自責とか自戒というのは、内向きになってしまうこととは違うと思います。なぜなら、教師が勝手にそう思い込んでいるということではなくて、「負い目」を忘れないようにしながら謙虚に子どもたちと接していくその過程で、子どもたちが見せてくれる姿からいっばい驚きや喜びを感じる機会があるはずだし、そういう経験を通じて教師自身が成長していくのだと思うからです。

ところで吉益論文全体のキーワードは、タイトルにある「教師の『まじめさ』」でした。最初吉益論文を一読した時、私はそこで論じられている恵那の教師の生きざまや5人の教師たちの語りから導かれる大切な価値が、日常用語としても多用される「まじめさ」という語で表現しきれるか？ という問いを持ちました。もちろん、「まじめさ」は、勝田守一「変革される教師像 — 林鉦三氏の実践が教えてくれるもの —」（1953）や佐藤広美『戦後教育学と戦争体験 戦後教育思想史研究のために』（2021）で取り上げられており、吉益氏も参照されたそうした先行研究を踏まえて読まねばならない概念であることはわかっているのですが、戦前教育への加担を経て戦後教育における再出発をした恵那の教師たちが持つ（1954年生まれの私には想像しがたい）自己形成に端を発して論じられているだけに、それが「まじめさ」という日常用語の文脈にも容易に繋げることができる用語に乗せて語られることに若干の危惧を感じたのです。

ですが一方で、「負い目」と結びついた目の前の子どもたちへの「まじめさ」という捉え方は、教師という職について率直に自己反省を加えながら進んでいこうとする者にとっては、自分の思考の枠組に引き入れやすい親近性を持っているのではないかとも思います。「まじめさ」という理念の中にいろいろなものが未分化に混ざり込んでいるような気もしますし、またそれは教師のあり方として外に向かって「まじめにやろう！」と運動論的に提起するのは違うような気もするのですが、教師の自省においては有効に機能するように思います。

最後に、吉益論文の紹介者である私が行なうこととしてはおこがましいかもしれませんが、本論文の抜刷を吉益先生からご送付いただいた時に添えられていたワープロ書きの添え書きを紹介させていただきます。本論文に込められた吉益氏の思いがよくわかる文章だからです。論文本文には含まれていない文章ではありますが、吉益先生が論文抜刷を送付された人びとに向けて書かれた文章であり、ある程度公的性格があるものと考えて引用させていただきます。

【2年前に『人間発達援助職としての教師論の考察』（1）勝田守一の教師論に着目して—を研究ノートとしてまとめました。今回の研究ノートは私自身は人間発達援助職の教師論（2）にあたるものと考えています。ただ人間発達援助職の教師論の概念や定義を明確に展開したものではありません。勝田守一が注目した恵那の教師たちの生き方、とりわけ生活綴方教師の「まじめさ」にしぼって考えてみました。その方法として5人の年齢の異なる教師、生活綴方を実践の中核に据えた人たちから聞き取りを行いました。聞き取りに協力していただいた方にあらためて感謝いたします。

今日の時代に「子どもとともに生きる教育実践」とはどういうことなのか。

「まじめさ」とは何に対して大切なのか。私は勝田守一の論文からなぜ恵那の教師たちが安易に戦後の新教育になじまなかったのかという問いをもちました。勝田は恵那の教師たちの「負い目」に注目したのではないか、その「負い目」とは何なのかなどを考えてみました。さらには「子どもとともに生きる」という思想はどういうものなのか、いくつかの問いがうまれました。私は「まじめさ」とは無批判に権力に迎合することではないと思っています。ただ、全てをこの研究ノートで解明したとはいえません。さらに新たな問いが生まれてきました。遅々たる歩みでかなりの時間を費やして一定の問題提起としてまとめをすることができました。今後も研鑽を続けていきたいと思っています。】

本連載では、次回から勝田守一『能力と発達と学習——教育学入門Ⅰ』（1964）を取り上げる計画です。わたくしごとですが、同書は私の学生時代の卒業論文の《ほぼ骨格をなしている》と言える主要参考文献です。卒論から44年を経た2021年から同書の再学習を開始しています。

《「戦後教育学」批判》への対応なども一つの動機としながらここ数年教育科学研究会の中でも勝田守一から学び直そうといういろいろな動きがあります。その一角を担おうなどとは夢にも思いませんが、私個人として40数年前に（当時既に他界されていましたが御著書を通じて）お世話になった勝田先生から学び直さなければとこの間考え続けていました。そんな時吉益先生から本論文をご恵贈いただいたので、吉益論文で言及されているのは私がこれから読み直そうとしている勝田の文献とは別の文献ではありますが、一研究者として勝田に再アプローチするにあたって自分にとっても重要な学びの機会となると考え、この連載で取り上げさせていただきました。

あらためて佐藤さん ありがとうございます。教師のまじめさ その立ち位置
について、さらに深めていきたいと思います。

高知市立自由民権記念館
—自由は土佐の山間より—

井上力省

2年前の全日本博物館学会(2021年6月)は、高知みらい科学館(オーテピア5階)で開催されました。同館は、高知市の中心部に位置し、近くには高知城、高知追手前高校があります。大会では「みじんこアート」の展示、国立アイヌ民族博物館の現状、博物館法に関わる課題などが発表されました。同学会の研究大会は博物館で行われることが大半なので、参加者は開催場所の博物館見学を兼ねることができるだけでなく、施設のバックヤードを知ることでもあります。高知市内の観光には路面電車の「とさでん」が便利です。均一運賃200円で乗り換え可能です。観光客に便利なMY遊バスの1日乗車券は600円と1000円と2種類の切符があります。

高知市立自由民権記念館(65歳以上は無料)では、行動する思想家であった植木枝盛(1857-1892)に関することがよく理解できました。35歳で亡くなっていたとは。日本国憲法に影響を与えたと云われる『東洋大日本国国憲按(日本国国憲案)』を著した植木は「未来が其の胸中に在る者、之を青年という」『無天雑録』と記しています。彼の旧邸が解体される前、歴史家・家永三郎は、昭和31年来高し、桜馬場にあった旧邸の書齋に3泊したそうです。家永の日本国憲法と植木枝盛への熱い思いが伝わってきます。高知の民権運動は、女性たち(冨永駱、吉松ます、山崎竹ら)にもその精神が広がっていたようです。1880年(明治13年)に婦人参政権が県令の反対にも拘わらず土佐の町村会(上坂町、小高坂村)で実現していたこともわかりました。女性参政権付与に奔走した小島稔は「男子にして婦女に投票し婦女も亦男子に投票したるもの少なからず」と、当時の様子を回想しています。

また、これまで政治運動、社会教育運動と理解していた民権運動は、文学や科学にまで影響していたらしい。言文一致運動は、民権運動が演説会や新聞で口語体表現を多用し大衆への普及を試みた結果、文学においても影響していたということです。二葉亭四迷らの文学革命と思っていたので、まさか民権運動と繋がっていたとはビックリです。鷗外はもとより漱石や露伴ら明治の作家たちは少なからず民権運動のうねりを体感していたことでしょう。学校教育も社会教育も自由民権運動から学ぶことは大きい、明治以降の近代化は改めて民権運動を抜きにして考えることはできないと思いました。

高知市は町のあちこちに、歴史的な建造物、記念碑、人物ゆかりの場所を示す石碑があります。メインストリートでは、明治時代から続いているという露天だらけの日曜朝市をやっているそうなのですが、時間がなく見学できませんでした。夜は地酒好きにはたまりませんので、また再訪したいものです。



高知市立自由民権記念館

次回は渡部代表の教室日記の予定です。

読書・映画・DVD・CD 情報（趣味的ですいません）

①先生が足りない

氏岡真弓

岩波書店

4月になっても担任の教師がいない。信じられない現実が今、日本の教育現場にあらわれている。先生になりたい人もへっている。非正規の教員もたりない。著者は丹念な取材でその状況を分析する。

②身体はトラウマを記録する

コーク

紀伊国屋書店

トラウマ はなくすことはできないのか。否。時間はかかるが克服できる。戦争に参加した人、虐待を受けた人。様々な症例と克服実践、脳との関係、治療の紹介をコークは語る。「心的外傷と克服」のハーマンが推薦。心と脳、身体、ストレスの関係がよくわかる。

③クロスロードの記憶

後藤正治

文藝春秋

休刊になった「週刊朝日」の連載が1冊にまとめられた。藤沢周平と茨木のり子、川藤幸三と江夏豊と2人の人物の交差点をノンフィクション作家は暖かくまとめていく。圧巻はチャフラフスカとクチンスカヤの2人の体操選手の生涯を描いた章。後藤の作品を読む時は至福の時間。

○怪物

2023 作品

坂元裕二脚本

是枝裕和監督

どこにでもある小学校の教室の風景。保護者の視点、教師の視点、子どもの視点で事実が異なってみえる。それはなぜなのか。怪物とは何なのか。みたあともじっくり考えさせる作品。

編集後記・よもやま話

- ※ 今回は第13回関西教科研集会の特集です。若い現場の教師の切実な声とそれに応答される高橋哲さんの講演、問題提起がかみ合い聞きごたえのある集会でした。佐藤研究ノートは私の拙文の、教師の「まじめさ」に論及されています。連載企画の井上さんの博物館紹介を読んで、行きたい場所が増えました。8月例会からの日程にご留意ください。
- ※ マイナンバーの混乱。アメとムチで急いでおこなったつけが一気にでている。だのに居直り、あらためようとしぬ政治。権力のおごり高ぶりをチェックせねば。流されないことが大事だと思います。地元の市議員選挙 大事に取り組みたいです。
- ※ 5月好調だった阪神タイガース。交流戦でズッコケました。いつものことかといえばそうですが、このままズルズル後退するか、盛り返すか、ここからが正念場ですね。
- ※ 私事ですが思春期の頃、過去、現在、未来を常に関連して考えることが大事と教えてくれた親友が亡くなり37年たちました。毎年6月 墓参りにいっています。「過去にこだわることはよくないけど、過去ときっちりむきあわないと今がいかげんになる」そんな彼の語りがいまでも脳裏に残っています。よくいわれる歴史に学ぶということでしょうか。人の生き方、組織のありかた、社会の方向なりを考えるとときに大事にしたいと思っています。もうすぐ梅雨があけ夏の到来です。お身体 ご自愛を。